

05-3 「やりたいこと」を家族と共に叶え、 最期の思い出に携わることの出来た一事例

○桑田 佳世子(OT)

地方独立行政法人神戸市民病院機構 神戸市立医療センター中央市民病院

Key word：家族支援，終末期，意思決定

【はじめに】頸髄損傷後の容体急変により看取りの方針となった事例に対する作業療法を経験し，意思決定後の家族の葛藤にどう寄り添うべきかを多く悩んだ。本人と家族の思いの橋渡しを行ったことで，家族と共に本人の「やりたいこと」を叶える最期の時間に携わることが出来た為，考察を交えて報告する。尚，本報告に際し患者家族に説明し同意を得た。

【症例紹介】80代男性，病前は妻と2人暮らしで軽度認知症あるがADLは自立していた。性格は明るく家族関係は良好，妻とは頻回に買い物や食事に行き夫婦の時間も大切にしていた。頸髄損傷疑いでZ日に当院搬送，Z+1日より作業療法開始となった。

【経過】初期は家族の意向により手術・延命措置は行わず，療養型病院へ転院の方針となっていた。安静度はベッド上安静，循環動態は昇圧剤・強心薬を使用しても不安定であった。覚醒は良好であったがせん妄症状を認め，声量は乏しく，会話は成立しにくい状況であった。筋力はC5までMMT2，C6以遠はMMT0，感覚は乳頭以下脱失しておりADLは全介助であった。本人からは「おかあちゃんに会いたい」と家族を思う発言が聴かれた。家族は毎日面会に来られるが「触ってあげてもいいのかな」等，本人への関わり方に戸惑う様子が窺えた。その為，コミュニケーションの確立により本人と家族の距離感を縮めることを目標に介入を進めた。次第にせん妄症状は改善され口頭でのコミュニケーションが図りやすくなり，家族が本人と過ごす時間も増えてきた。

しかしZ+11日，気道内トラブルがあり主治医と家族の話し合いの上，昇圧剤・経管栄養の使用が中止となり当院で看取りの方針となった。ここでもう一度本人と家族の思いを聴くと，本人からは自身の現状理解は曖昧であったが「外に行きたい」，「おいしいもんが食べたい」，「嫁さんの笑顔が見たい」と聴かれた。このことを家族に伝えると，「したいことをさせてや

りたい」と言われる一方，「自分たちで息の根を止めてしまうようで辛い」と涙を流された。そこで目標を，やりたいこと・してあげたいことを形にしていく，本人と家族と一緒にできることを提供することと再設定した。他職種間で本人と家族の思いに関する情報共有を密に行い，介入時に看護師同伴の下行う等安全管理を行った上で，家族の面会時間に合わせてベッドでの屋外散歩やポジショニング下で好物を食べること，マッサージ等を家族と一緒に実施した。実施中，本人と家族の笑顔が多く見られ，散歩等は後から楽しかった思い出として話されていた。また，本人から思いを聴く中で「おかあちゃん愛しとる」，「いつもみんな来てくれて嬉しい」と直接は恥ずかしくて言えなかったという感謝の言葉を聴くことができた。家族に伝えると妻が涙を流しながら「ホッとした」と話された。Z+24日に他界された。

【考察】池知らは，終末期において楽しい時間を共有できた思い出を作ることも家族配慮の面から尊重すべきと報告している。本症例では本人と家族の思いの橋渡しが出来たことで本人の「やりたいこと」を家族と共に形にし，家族の思い出を作ることが出来た。このことは家族を大切に思う本人にとって最期の楽しい時間となり，家族にとっては後悔・自責の念を軽減し，「させてあげたいこと」が出来たという満足感に繋げることができたと考える。治療の選択肢がある中で看取りという選択をする家族の心理的負担は計り知れない。本症例を通し看取りに関わったことで，本人と家族の思いを繋ぎ家族の最後の思い出を作ることが辛い意思決定をした家族の心の支えとなり得ると強く感じた。